平成28年度授業改善推進プラン

清瀬市立清瀬第四中学校第 2 学年

	学力調査から見えた課題（調査のない教科は授業における課題）	授業改善のための具体策（重点）
国語	・書く能力について目標値よりかなり低い。	・視写課題を通して書くことの形式を覚えると共に、文章を読み解く力を養っていく。 ・読み解く力をさらに深めるために、中学一年生までの習得漢字を毎時間の漢字テストを通して復習する。
数学	・基礎的な知識や技能が身についていない生徒が多い。これは授業に取り組む意識の低さや家庭学習の不足によるものと考えられる。 ・下位層の人数が多いために平均値は低くなっているが、上位層では思考力・表現力・判断力なども育ってきている。	・家庭学習を習慣化させるために、授業ごとに簡単な宿題を出すようにする。 ・基礎コースでは知識や技能が定着するように、プリントや授業の進め方を工夫する。 ・標準コースでは、数学的な活動をさらに取り入れた授業を推進する。
社会	・「思考・判断・表現」の力は伸びている。 ・「資料活用の技能」や「知識・理解」の定着が低い。	・地図やグラフを読み取って、課題を解決する力はついてきているので今後も考えさせる時間を作る。 ・世界地理の国や地形の知識・理解、そして歴史の知識・理解がかなり低いので、定期的な小テスト等を増やす。
理科	・関心をもって意欲的に学習に取り組み、課題を解決しようとする姿勢が低い。 ・観察、実験の結果に対する考察ができない生徒が多い。 ・基礎的、基本的な知識、理解力は身についている。	・学習内容と関連している身近な事象を例として話題に取り上げて、学習への関心を高める。 ・課題設定を工夫し、グループ活動なども取り入れて、生徒たちが自ら考えて解決する場をつくる。 ・観察、実験結果の考察の仕方について、適切な助言を行って、文章で表現できる力を身につけさせる。
音楽	・音楽表現をすることに対して、抵抗を感じる生徒が多い。 ・リコーダーでは、根気よく練習に取り組む力が不足している。 ・鑑賞では、楽曲のもつ特徴や良さに気付き、感じたことを言葉で表す力が低下している。	・自信をもって表現し、楽しむことができるよう発表の機会を増やし、前向きな声かけをし、達成感を味わう経験を積む。 ・個々のレベルに応じた楽曲を選曲できるようにする。 ・鑑賞の際に、楽曲をあらわすいくつかの言葉を提示し、選択をしながらその特徴をつかんでいく。
美術	・発想やアイディアを根気よく練り、自分だけの表現につなげていく力の不足。 ・表現と鑑賞を有機的に結びつけて、仲間の作品についても肯定的な視点で捉え、作者の思いを感じ取ろうとする鑑賞力。 ・感じたこと、考えたこと、鑑賞したことなどを自分の言葉で的確に表現すること。	・美術を学ぶ意義を多面的に伝え、興味の持てる題材設定を工夫する。また表現・制作の中でも、数分の鑑賞タイムや発表時間を設け、鑑賞場面のある授業展開を増やし、表現と鑑賞の相関を意識させる。 ・制作カードへの記入など言葉で考えることを通して、制作過程の振り返りをより深めさせる。また、完成作品について批評をし合うなど、言語活動を取り入れ、言語能力や鑑賞力の向上を図る。
保健体育	（男子） ・授業規律に課題がある。 ・場面による行動の判断力が足りない。 ・基本的運動能力が低い。 （女子） ・基礎運動能力が低い。 ・競争心が低い。	（男子） ・集団行動訓練を継続する。 ・行動基準を明確に示す。 ・準備運動を工夫し、体力向上に努める。 （女子） ・アップ、補強運動、ダッシュ、メイン練習等で運動能力向上を図る。 ・ゲームを通して向上心、競争心を育てる。
技術・家庭	（技術科） スマートフォン、タブレットの普及により、パソコンの操作、特にキーボードの操作が不慣れな生徒が目立つようになった。 （家庭科） ・集中力や基本的な学習の雰囲気を作れない事が多い。 ・提出物に対する取り組みに差がある。 ・知識や状況を理解した上での行動をとれない生徒がいる。	（技術科） タブレット端末とは違う、パーソナルコンピュータの利点を強調できるように、ワープロ、表計算、プレゼンテーションソフトそれぞれでできるだけ多くの作業ができるように、演習を中心とした授業展開を行う。 （家庭科） ・ポイントを絞って理解できるようにする。 ・提出するまで呼びかける。 ・授業規律を常に意識させる。
外国語（英語）	・活動への取り組みから関心や意欲は見えるが、間違いを恐れて発言しない生徒が多い。 ・感覚的に正しい語順で文を書くことと、細かな文法知識を正確に使って正しい文を書くことについてのどちらも十分な力があると言えない生徒が多い。	・簡単な質問は指名制にするなど発言の機会を増やし、「できた」「合っていた」という安心感、達成感を得られるようにする。 ・より多くの例文に触れて音読の機会を増やすことで、目だけでなく耳でも感覚的に正しい英文を捉えられるようにする。